

# 自殺者を減らす！ ゲートキーパーとしての生き方

判 型 四六版

発行年 2024年

総頁数 230頁

発行所 新評論

定 価 2200円（税別）

住 友 雄 資\*

## 1. 本書の意義と特徴

本書は、筆者のこれまでの実践や研究活動を土台とした上で、「自殺名所」「駆け込み」先での自殺予防活動者の取り組み、特にそこでのゲートキーパーの活動に焦点をあてたものである。

ここでいうゲートキーパーとは、内閣府（2013）の『ゲートキーパー養成研修用テキスト（第3版）』によれば、「悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人」を指す。自殺の危険性が高い人に初めて接点をもつ立場にあるから、「気づき」「声をかけ」「話を聞」く人という役割は重要といえる。そのために、心理社会的問題や生活上の問題、健康上の問題を抱えている人など、自殺の危険を抱えた人々に気づき適切にかかわることが求められる。ゲートキーパー養成研修の受講はあるにしろ、取り組みによって経験を蓄

積し、対人援助のトレーニングを積み重ねていく必要があるだろう。

この「気づき」「声をかけ」「話を聞」く人に加え、「必要な支援につなげ、見守る」人をゲートキーパーとするならば、医療・相談機関等で専門的支援を行っている精神科医や保健師、精神保健福祉士などの専門職や行政等につなげるということが自殺予防者としての役割となる。これは言葉で説明すると簡単なことのように聞こえるかもしれない。これらすべての役割を担うゲートキーパーとは命の最前線に立って重責を担っている人なのであり、もし公が安上がりに使おうなどと考えるとすれば論外といえる。

本書に登場してくるゲートキーパーへのインタビューから、ゲートキーパーの等身大の姿を感じ取ってもらえればと思う。

\* 福岡県立大学人間社会学部・教授

## 2. 本書の構成と成果／章毎への評者からのコメント

まえがき、あとがき、付録を除き、全体の構成は6章立てで、大別すると3部構成となっている。それらは、本邦における自殺動向を扱った第1章、自殺多発地域（ハイリスク地）における自殺防止活動やその活動に携わっている人々を紹介した第2～4章、宗教活動による自殺予防を示した第5～6章の3部である。

### 【第1章 我が国における自殺の動向】

第1章では、世界保健機関（WHO）、厚生労働省から公表されている白書・統計資料を用いて我が国における自殺の動向を解説している。

国際的にも先進7カ国の中でわが国は自殺死亡率が最も高く、特に女性の自殺死亡率が高いことを指摘している。

国内に目を向けると、戦後の自殺者数の推移が第1次自殺急増期（1950年代半ば～1960年代）、第2次期（1980年代）、第3次期（1998～2008年）というピーク期があったこと、これらの背景をふまえて、2006年には自殺対策基本法制定とこれに基づく自殺総合対策大綱策定（これまでに第4次改定が行われた）があり、その成果なのか少しずつではあるが自殺者数は減少してきていたとする。しかし新型コロナウイルス感染症の感染拡大と相俟って、近年自殺者数が増加傾向に転じている。特に女性の自殺者数が2020年以降に増加している。

その他、2021年の死因順位別では、10～39歳（つまり若者から中年まで）死因第一位が自殺である一方、45歳以降に死因第1位となるのが悪性新生物（腫瘍）であることは、どの世代に自殺予防対策の重点を置くかが見えてく

る。また自殺の手段や場所についての言及もある。自殺手段別に見ると、最も多いが「首つり」で、その次に「飛び降り」「練炭」「入水」「飛び込み」などと続く。自殺場所別に見ると、第一の「自宅」が圧倒的に多く、「高層ビル」「乗物」「海（湖）・河川」などと続く。この手段と場所の傾向を念頭に置いた自殺予防対策を講じることが必要不可欠となる。

わが国の自殺傾向の推移と同時に、著名人の自殺とマスメディアについても言及している。これはウェルテル効果（1774年刊行のゲーテの代表作『若きウェルテルの悩み』から、その主人公を真似て同様の方法で自殺する若者が相次いだことに由来し、報道に影響されて自殺者が増える現象を指す）を防ぐため、WHOによる自殺報道ガイドライン等の公表によって、これらに基づき自殺関連報道の「やるべきこと」と「やってはいけないこと」を示している。近年このガイドラインによって自殺に関するマスメディアの報道方法にも変化が生じてきていることは評者も承知している。一方、ネット上での誹謗中傷という書き込みによって自殺に追い込まれるケースも取り上げ、深刻な問題点を指摘している。

わが国の自殺を巡る全体傾向を提示するという第1章全体のコンセプトからか、著者は自殺の現状などについて筆者の意見を避ける記述に終始していると言えまいか。例えばマスメディアの報道方法について言えば、「メディアには、自殺予防としての取り組みを期待したいところである」など、一見正当ではあるが、悪く言えばあたかも傍観者のような立場での記述がこの章では散見されるのが評者としては残念である。

### 【第2～4章 青木ヶ原樹海・三段壁・東尋

坊】

タイトル及びサブタイトルにもあるように、第2～4章が本書のメインとなる。各章で自殺多発地域として青木ヶ原樹海（山梨県）、三段壁（和歌山県）、東尋坊（福井県）を取り上げている<sup>1)</sup>。そこでの自殺予防の取り組みやそれを中心的に担うゲートキーパーに筆者がインタビューした内容を記している。インタビューは自殺予防事業を実施している監視員、役員であり、牧師や元警察官などの経歴を有する。

インタビュー内容はさまざまなだが、ゲートキーパーとしての役割を真剣に果たす奮闘記と理解することができる。インタビューからは、この地にたどり着いた人のさまざまな感情が示される。例えば、ここへ「行ったら死ねるかなと思っ」た人、飛び込もうとする人を襟首を引っ張って止めた時に「僕はこんなに苦しいんです。死なせてください」って哀願する人、複数回来ている人で「声をかけて欲しいという素振りをする人」、「誰にも知られずに死なせてくれて思いつつも、どこかで『見つけて欲しい』と思う」人、自殺をする場を探して他のスポットをめぐる人などである。さまざまな面で迷っているのである。そして内面に迷いをもつ自殺志願者の行動に表れる「迷うような動き」を素早くキャッチするゲートキーパーの経験知などはもっと広く知られるべきである。インタビューのなかで筆者はさらっと流してしまっているが、評者としてはここをさらに深めたアクティブなインタビューを行って欲しかった。なぜならば、これこそが自殺志願者とのファーストコンタクト場面でゲートキーパーが全身全霊を打ち込んで相手に向き合おうとする根源を示しているからである。

興味深かった点を一つあげたい。それは本書

の表紙と裏表紙にも写真として掲載している立て看板等に対するインタビューの賛否等である。この立て看板等は、通常自殺志願者に見えられると思われるところに自殺を思いとどめる文面（句碑等を含む）と連絡先（電話番号等）を記して設置（その文面等を公衆電話ボックスに貼りつけたものを含む）されたものである。青木ヶ原樹海のインタビューはパトロール中心の活動によっているので、立て看板等は必要なく、むしろ自殺予防には逆効果だと言い切る。三段壁のそれは公衆電話ボックスのメッセージをみてかかってくる電話相談とその後の共同住居での自立支援が活動の主軸となっていることから立て看板等の必要性を示す。東尋坊も立て看板や句碑が設置されているが、本書ではこれについての言及はない。ただ最近ではドローンを導入し、空と陸からの両面での早期発見を試みて自殺志願者に直接アプローチするという方法を採用しているので、立て看板等そのものへの賛否はないのかもしれない。もしかしたら立て看板等を設置することで、観光業者や行政は一応の責任を果たしているつもりになっているという考えは持っているかもしれない（評者の憶測の域はでないが）。

このように、それぞれの地での活動内容によって立て看板等一つにもいろいろな考えがあることがわかる。そこにゲートキーパーの自殺予防についてのこだわりも見え隠れしているといえよう。インタビューに発言させているだけでなく、筆者による立て看板等への言及や意見表明がないことは評者として残念である（簡単に賛否等は言えないだろうが）。

【第5・6章 キリスト教／仏教における自殺予防】

第5～6章では、牧師と僧侶へのインタ

ビューで構成されている。もちろん自殺志願者への対応や内容等に触れているし、記述内容そのものに問題はない。しかし、正直言ってこの2つの章は本書に必要だったのかという疑義はある。

このインタビューは救済と宗教に関心ある者にとっては意味あるものかもしれない。宗教を前提としたものになるので、どうしても教義の説明に分量が占められている。必要性の理由は理解できるし、ゲートキーパーの活動というよりも電話等の相談についての言及に偏っているのではないか。それよりも評者は、第2～4章で取り上げられた自殺多発地域以外でのゲートキーパーの活動を取り上げる方が本書の主旨（本書のタイトルとサブタイトルからも）に合致しているのではないかと、例えば、本書にもちろりと登場した足摺岬（高知県）、ヤセの断崖（石川県）などである。また筆者も取り上げている厚生労働省の『自殺多発地域（ハイリスク地）支援の在り方に関する調査報告書』（抜粋）で収集された33都道府県150か所の自殺多発地域の事例のいくつかから選ぶ方法もある。青木ヶ原樹海・三段壁・東尋坊の三か所にこだわらず、他の自殺多発地域でのゲートキーパーの活動を取り上げる方が本書のねらいを体现できる。

蛇足であるが、付録に自殺を踏み留まるための支援一覧（各種相談支援機関、食糧支援や生活福祉資金貸付制度、生活保護・生活困窮者支援制度）が簡潔に記されている。自殺志願者にとっての必要な制度等であることは疑いないところであるが、急にゲートキーパーから転じて自殺志願者の視点に移ったものであり、評者としては違和感を覚える。あえて言わせてもらえば「取って付けた」感ありである。

### 3. 本書全体への疑問点と今後の研究課題

章毎のコメントは前述したので、ここでは本書全体に関する疑問点と今後の研究課題について述べてこの書評を閉めたい。

まず第1章での記述が他の章とのつながりが薄いことである。わが国の自殺の現状を記す第1章の記述内容が後に続く章を導くというのが基本スタンスであるとすれば、せっかく第1章でわが国の自殺の現状などについて統計資料を用いて解説したのであるから、そこから他の章で取り上げている具体的な自殺予防活動とのつながりを示すことが必要ではないか。例えば、第1章で、10歳～35歳代の若者・中年世代に自殺予防対策の重点を置く必要があると記述しているにもかかわらず、第2～6章のインタビューで若者・中年世代への言及を整理して記述していないことは残念である。また自殺手段・場所別の現状を鑑みれば、第2～4章で最も多い「首つり」や「飛び降り」「入水」「飛び込み」などは自殺多発地域を取り上げる理由にはなるが、圧倒的に多い「自宅」や次の「高層ビル」と自殺多発地域との関連性が低いことは説明不足であろう。さらに女性の自殺者数が増加しているという傾向を、第2～4章のインタビューのなかでどのように対応しているのかなどを踏み込んでいないことも指摘しておきたい。

次に本書全体を貫く骨格をゲートキーパーの活動とするならば、第1章にゲートキーパーに関する記述（現状や問題点、今後の課題など）が不足しているし、第2～4章のインタビューの内容から質的データの分析などを通じて、筆者自身のゲートキーパー像を暫定的であっても提示することがあってもよいと考え

る。もちろん本書は学術書ではないので（どちらかと言えば、いわゆる啓発書に近い）、そこまで求めるのは酷といえるかもしれない。しかし本書ではインタビュー内容をほぼRaw Dataで表示するレベルにほぼ留まっており、それでゲートキーパーの役割などを示す手法では読者には説得力が弱い<sup>2)</sup>。是非とも「ゲートキーパーとしての生き方」という本書のサブタイトルに迫り、かつメインタイトルである「自殺者を減らす！」を実現することにつなげるという本書の目的を達成する書籍等の刊行を評者は願っている。

これらをまとめていえば、「論理の展開にかかる一貫性」「説得力ある手法の採用」「論理の帰結としての筆者自身の主張」が不足しているといえよう。

これらのコメントそのものが、筆者の今後の研究課題となっていく。これまで筆者は島嶼の自殺に関する論文を発表してきており（波名城 2019；波名城 2020；波名城 2022a；波名城 2022b；波名城 2023）、評者も目を通して、既存統計データを活用したものを除き、質問紙調査によるもの（波名城 2022b；波名城 2023）は統計処理を行って学術論文としての位置づけは可能だが、インタビュー調査によるもの（波名城 2019；波名城 2020）はほぼRaw Dataの整理レベルで本書とほぼ同じである。今後筆者が質的調査法を用いて学術書（学術論文を含む）を執筆するならば、量的研究と同水準のものをめざすべきであり、評者が指摘した「説得力ある手法の採用」を行ったうえで、「論理の展開にかかる一貫性」と「論理の帰結としての筆者自身の主張」を適切に提示することである。

せっかくゲートキーパーを対象とした研究に

着手したのであるから、例えばゲートキーパーが自殺場所で最も多いとされる自宅での自殺防止活動について、量的な測定することに馴染まない（また量的測定からこぼれ落ちる）ものを質的調査法でデータを収集・分析し、ゲートキーパーの価値観・信念などを捉え、自殺防止に関わる動的で相互作用的な現象を詳細に記述していったほしい。なぜならばゲートキーパーに関する既存の研究は、ゲートキーパーの知識やスキルを評価する指標を開発するもの、自治体におけるゲートキーパー研修に関するものが多い。これらの研究の必要性はいうまでもないが、実際の活動に従事しているゲートキーパーから得られる質的データに着目した研究、質的データから得られる深く掘り下げた結果にこそ、直接自殺を防止する実践に寄与するものであることは明白である。ゲートキーパーを取り上げた本書は評価に値するが、本書での記述で終わってしまうのはもったいない。評者が筆者に最も期待するのはこの点である。

#### 【註】

- 1) この三か所は、いわゆる観光地（その近隣）でもある。評者は、河口湖までは行ったが青木ヶ原樹海にはまだ行ったことがない。三段壁と東尋坊は観光で行った経験がある。
- 2) なおこのことに関して、評者の個人的感想でいえば、東尋坊の茂さんのインタビュー内容には興味がわいた。特に自殺志願者の背景にある社会的構造にまで踏み込んだ発言には関心がある。しかし、茂さんの言葉を本書で記して「ゲートキーパーの生き方」を示すだけでは、研究者が行う活動としては不十分であろう。

【文献】

- 波名城翔（2019）「離島における精神障害者支援の現状と課題—自治体への調査から—」『現代社会学部紀要』17（1），61-70.
- 波名城翔（2020）「離島における自殺の現状」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究紀要』19（1），17-24.
- 波名城翔（2022a）「離島自治体における自治体外自殺者の特徴」『島嶼地域科学』3，95-107.
- 波名城翔（2022b）「離島市町村における自殺死亡の現状と社会生活指標との関連」『厚生指標』69（12），23-30.
- 波名城翔（2023）「離島市町村における自殺対策の取り組みの現状と課題—アンケート調査から—」『九州社会福祉学』19，51-65.